

私の三十句

端つこ

岩淵如雨

端つこの孫の名を訊くお元日
七種の夜も望みて残り粥

へ青

薄氷をいくつ苛めし傘の先
老い至福大川端の花疲
遠山のあれば詩になる葦かな
恋猫の勾玉のごと寝ねにけり
溜息も吹けば虹色しゃぼん玉

へ朱

昼の日の暗みて歓呼雨蛙
炎昼や朱色気怠き中華街
猫の知る風の道あり夏座敷
息荒き男鹿の太鼓や宿浴衣
厳めしき山も寝そべる大暑かな

へ白

秋晴や同じふるさと語りけり
この穴は誰の近道木槿垣
晩菊や老いを自慢の待合室

遠祖も通りし畦や曼珠沙華
冬近し嵯峨野の奥の石仏

へ玄

山巖を瞭かにして冬に入る
実を枝にいのちまつたう柿落葉
長旅の神も寛ぐ小春かな
後退るほどの山容寒に入る
早梅や二の腕細き早生れ

へさと

その昔は牛などをりし春田かな
大青田伊達は六十二万石
北風やとほき縁ある墓一基
ふる里の咳には訛無かるべし

へさけ

酒徒となる懐旧の宴余花明り
新酒酌む五臓に感謝そして詫び
鱈酒の青き炎と遊びけり
ジンに浮く氷音澄む霜夜かな

(俳句を始めて十五年。三十句を選んでみて、あらためて今なお端つこに居ることに合点がいました。)

私の三十句

端つこ 岩渕如雨

端つこの孫の名を訊くお元日
七種の夜も望みて残り粥

へ青

薄氷をいくつ苛めし傘の先

老い至福大川端の花疲

遠山のあれば詩になる葦かな

恋猫の勾玉のごと寝ねにけり

溜息も吹けば虹色しゃぼん玉

へ朱

昼の日の暗みて歓呼雨蛙

炎昼や朱色気怠き中華街

猫の知る風の道あり夏座敷

息荒き男鹿の太鼓や宿浴衣

厳めしき山も寝そべる大暑かな

へ白

秋晴や同じふるさと語りけり

この穴は誰の近道木槿垣

晩菊や老いを自慢の待合室

遠祖も通りし畦や曼珠沙華
冬近し嵯峨野の奥の石仏

へ玄

山壁を瞭かにして冬に入る

実を枝にいのちまつたう柿落葉

長旅の神も寛ぐ小春かな

後退るほどの山容寒に入る

早梅や二の腕細き早生れ

へさと

その昔は牛などをりし春田かな

大青田伊達は六十二万石

北風やとほき縁ある墓一基

ふる里の咳には訛無かるべし

へさけ

酒徒となる懐旧の宴余花明り

新酒酌む五臓に感謝そして詫び

鱈酒の青き炎と遊びけり

ジンに浮く氷音澄む霜夜かな

(俳句を始めて十五年。三十句を選んでみて、あらためて今なお端つこに居ることに合点がいました。)